

《研究ノート》

流通経済大学スポーツ健康科学部における教育実習に関する調査報告

—2021年教育実習振り返りアンケートから—

松田 哲

Research report on educational practice at RyutsuKeizai University

—Questionnaire that omits the educational training in 2021—

Tetsu MATSUDA

キーワード：スポーツ，教育実習，保健体育

Key Words: Sports, Educational training, Health and physical education

【要旨】

本調査は、流通経済大学スポーツ健康科学部で保健体育の教育実習生として実習を終了した学生を対象に、実習終了後のアンケートを集計し報告するものである。これまでも事後アンケートを実施してきたが、担当種目や担当単元が中心であったことから今回の調査では、2019年度の調査同様に「苦勞したこと」について授業編、生徒理解編・人間関係編・その他の4項目に分けて聞いている。授業編では「指導案の作成」「授業の仕方や方法」「教材研究」が上位3項目、生徒理解・人間関係についての上位は「生徒とのコミュニケーションの取り方」「生徒への褒め方や叱り方」「生徒との距離感の取り方について」の順となっている。また「今後大学で取り入れてほしい内容」についても調査項目に含めて、学部全体として共通理解を図る資料としたい。

1. 2020年度の教育実習状況

2019年の年末から世界的に広がった新型コロナウイルス（以下コロナ）がパンデミックとなり、2020年初めには日本でも感染者が増加し急速な蔓延化が進んだ。政府は新型コロナウイルス

対策の特別措置法を成立させ、2020年4月（解除は5月下旬）には首都圏や関西・九州の大都市7都府県に緊急事態宣言を出し、その後対象が全国に拡大された。そして本学の所在地である茨城県は、特に重点的に感染拡大防止の取り組みを進めていく必要があるとして、「特

定警戒都道府県」に位置づけられた。このような状況の中で、首都圏や大都市圏の大学ではオンラインによる授業やオンデマンドの授業展開を余儀なくされたのである。

例年、教育実習の実施開始は5月下旬から6月一杯が主であり、学校現場でもその対応に苦慮していた。本学でも4月の段階では、教育実習の5月開始が30名、6月開始が26名であった。(秋学期開始が41名、未定が12名)そのような中で文部科学省(以下文科省)は4月8日付で「令和2年度における教育実習の実施にあたっての留意事項」を通達し、実習開始時期を秋学期へ変更することや実習期間を一定期間縮小させることなど弾力的な対応を求めてきたのである。さらに同年5月1日付で「令和2年度における教育実習の実施期間の弾力化について」を通知し、これによって教育実習は、実習校の状況により、実習期間全体の3分の1の短縮が可能となり、その短縮された期間分を大学での授業や地域での学習支援等で充足することが出来るという特別処置が施されることになった。これによって本学では、実習校からの要請があれば、3週間の実習の内1週間を短縮し、学内での代替えが可能になった。さらに文科省から8月11日付で「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行について」の通知文があり、令和2年度に限った特例処置として、実習校の状況を鑑み、教育実習が受けられない学生に対して、課程認定を受けた教育実習以外の科目の単位をもってあてることができるという「教育実習特例」という措置がとられるようになった。さらに同日付で「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律施行規則の一部を改正する省令等の施行について」が通知され、3

年生を対象に実施している「介護等体験」についても、大学内での代替処置が行われるようになった。

本学の保健体育の教育実習予定者は5月1日の段階で、109名(スポーツ健康科学科69名、スポーツコミュニケーション学科40名)であったが、同日には85名の学生が秋学期への変更または「未定」という状態になっていた。結果的に春学期に教育実習を実施した学生は3名(教育実習を行った全体の3.1%)で、秋学期への変更をした学生が95名となった。そして実習校からの要請による「教育実習特例」が9名、実習期間の変更等もあり自主的に辞退した学生が13名と例年より多くなっている。(表1参照)なお、「教育実習特例」の学生には大学所在地自治体の小・中学校での学習支援を2週間程度実施した。

表1 2020年度教育実習実施状況(保健体育)

教 科	教育実習 申請	実習実施者		教育実習 特例	実習 辞退
		春学期	秋学期		
保健体育	120名	3名	95名	9名	13名

2. 2021年度の状況と調査項目

2021年度になってもコロナ禍の状況は続き、昨年同様に緊急事態宣言や蔓延防止等重点措置が多くの都道府県地に出される状況であった。文科省は4月13日付で、昨年度の教育実習特例の延長を通知している。(教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行について)また介護等体験についても、同日付で昨年同様の通知があった。

一方で今年から医療関係者や高齢者を中心にワクチンの接種が開始されたものの、大学生への接種は9~10月頃になっていた。従って例年

の教育実習期間（5～6月）にはワクチンを接種していない学生が殆どであった。教育実習前にワクチン接種を義務付ける実習校は無かったが、PCR検査を義務づける実習校はあった。2021年度の教育実習実施者は、86名（スポーツ健康科学科70名，スポーツコミュニケーション学科16名）であったが、昨年ほど秋学期への変更はなく，教育実習を行った全体の75.9%が春学期の実施であった。（表2参照）

表2 2021年度教育実習実施状況（保健体育）

教科	教育実習申請	実習実施者		教育実習特例	実習辞退
		春学期	秋学期		
保健体育	95名	65名	21名	0名	9名

当該アンケートは教育実習終了後，2週間以内を目安にWebで回答させたものであるが，報告書を作成している段階では調査回答者（N）は80名であった。

調査項目
1. 教育実習を実施した校種
2. 母校での実習かどうか
3. 教育実習時期
4. 教育実習の開始時期
5. クラス担任は何年生
6. 体育実技の担当学年
7. 保健体育の担当学年
8. 体育実技の授業スタイル
9. 授業を実施した回数
10. 自分一人で授業をした回数
11. 本気で教師になりたいと思ったか
12. 教育実習で苦勞したことや上手くいかなかったこと（授業編）
13. 教育実習で苦勞したことや上手くいかなかったこと（生徒理解）
14. 教育実習で苦勞したことや上手くいかなかったこと（その他）
15. その他自由回答
16. 大学の授業で取り入れたいこと
17. その他自由回答

18. 教育実習に関する自由回答
19. 今年の教員採用試験受験の有無
20. 卒業後の講師希望
22. 高校の体育実技で実施した単元
23. 高校の保健で実施した単元
24. 高校の保健体育以外の実施科目
25. 中学校の体育実技で実施した単元
26. 中学校の保健で実施した単元
27. 中学校の保健体育以外の実施科目
28. 所属学科

3. 分析結果

1) 回答者の属性

回答者数は80名（全体の93%）であり，回答者の属性は，スポーツ健康科が66名（82.5%），スポーツコミュニケーション学科が14名（17.5%）であった。実習校は高校が43名（53.8%），中学校35名（43.8%），中高一貫校1名（1.2%），義務教育学校1名（1.2%）であった。実習期間は3週間が72名（90%），2週間が8名（10%）であった。教育実習先の学校が出身校であるかどうかでは，出身校が74名（92.5%），出身校以外が6名（7.5%）であった。さらに教育実習の時期は5～6月が65名と最も多く，秋学期の実施者も21名とコロナ禍前の2019年の状況と比べると多くなっている。

表3 回答者の属性

所属学科	スポーツ健康科学科66名 (82.5%)		スポーツコミュニケーション学科14名 (17.5%)	
実習校	高校43名 (53.8%)	中学校35名 (43.8%)	中高一貫1名 (1.2%)	義務教育学校1名 (1.2%)
実習期間	2週間 8名 (10%)		3週間 72名 (90%)	
出身校の有無	出身校 74名 (92.5%)		出身校以外 6名 (7.5%)	

表4 教育実習開始時期 (2019~2021) (人)

実習開始時期	2021年度	2020年度	2019年度
5月	56	2	3
6月	9	1	64
7月	0	0	3
8月	1	6	1
9月	7	30	4
10月	8	43	0
11月以降	5	6	0

※数値はアンケートの回答数から算出

2) 授業観察と教壇実習

教育実習では、クラス担任に付いて学級経営やクラス運営なども学んでいくことになるが、中学校では1年生(15名18.8%)、高校では2学年(17名21.3%)が多くなっている。また学年による大きな差はみられない。

続いて授業観察と教壇実習であるが、授業観察は5回以内が28名(35%)と最も多く、6~10回と、11回以上が25名(31.3%)で同数となっている。(図1参照)

次に自分自身で授業を行う教壇実習についてだが、ここではTTではなく自分一人で授業を行った回数を聞いている。最も多いのは10回以内で30名(37.5%)、次いで11~20回が27名(33.8%)、21~30回18名(22.5%)の順となっている。最も多くの教壇実習を行ったのが41回(1名)となっている。(図2参照)

3) 体育実技の担当単元と保健の担当単元

・中学校

まず体育実技であるが、中学校では陸上競技

Q9.授業参観の回数ほどのくらいありましたか?

80件の回答

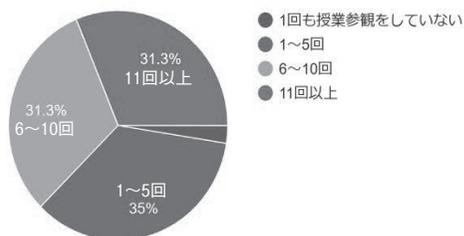


図1 授業観察の回数

Q10.教育実習で自分だけで授業を実施した回数は何回ですか?

80件の回答

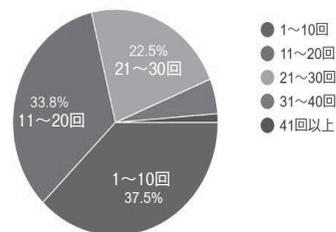


図2 自分一人での教壇実習の回数

だけで18名が授業を担当している。(ハードル5名, 走り幅跳び4名, 短距離4名, リレー2名, その他3名) その他バレーボール, 器械運動(マット運動), 体育祭練習等の単元が多くなっている。当然時期が5~6月が多いことから, 担当単元は時期によって異なってくる。その他の項目では, バドミントン4名, ソフトボール・野球3名などが多くなっている。(図3参照)

・高等学校

次に高校の体育実技であるが, バレーボール17名, バスケットボール12名が多く, 次いで野球・ソフトボール, サッカー, 体育祭準備, 体力テストが11名となっている。中学校に比べると柔道やバドミントンなど実習生の専門の種目を担当するケースもみられる。その他の項目では, テニス5名や卓球5名, 水泳4名やハンドボール2名などが見られた。(図4参照)

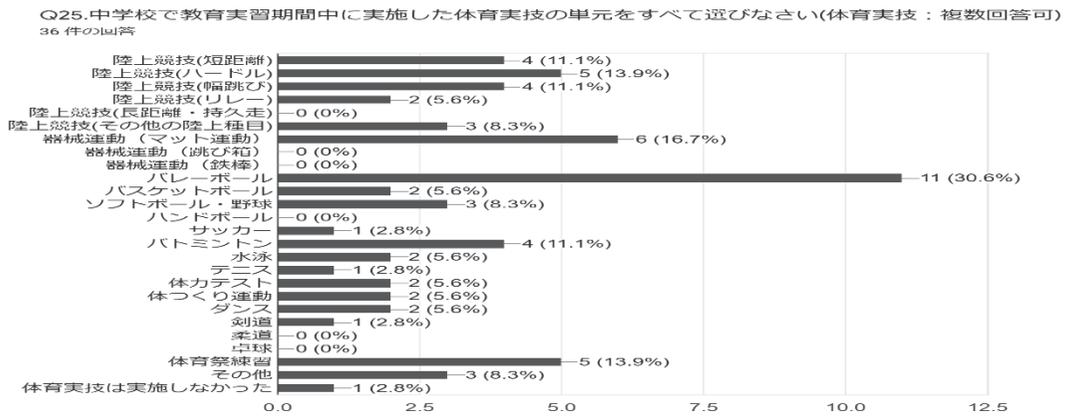


図3 中学校での体育実技の単元(複数回答)

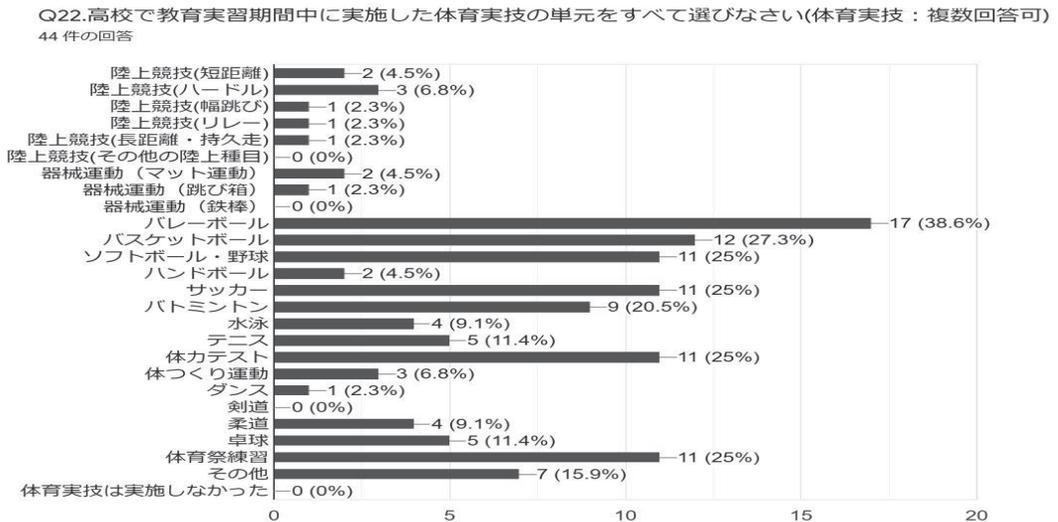


図4 高校での体育実技の単元(複数回答)

続いて保健だが、中学校は35名の実習生の内21名(58.3%)が保健の授業を担当していない。高校に比べると中学校では保健の担当が少なくなっている。

保健以外でどのような教科を担当していたのかを示したのが図5である。中学校では道徳24名(66.7%)が多く、次いでLHR15名(41.7%)、総合的学習の時間7名(19.4%)であった。大学の教職課程でも中学校免許状には「道徳教育論」が必修化されているが、教育実習では専門科目に限らず道徳教育の教材研究や指導方法も必要になってくる。

一方高校は、担当学年によって単元は変わるものの幅広く保健の単元を担当していることが

分かる。(図6参照)

高校において保健体育以外で担当した単元としてはLHR38名(86.4%)が最も多く、次いで総合的学習の時間14名(31.8%)となっている。高校では道徳4名(9.1%)の担当は少なくなっている。

4) 苦勞したこと(授業編, 生徒理解・人間関係編, その他)

ここでは実習校種に限らず、教育実習で「苦勞をしたこと」について、授業編, 生徒理解・人間関係編, その他に分けて複数回答で回答したものをまとめたものである。授業編では、指導案の作成64名, 授業の仕方や方法50名, 教材

Q27.中学校で教育実習期間中に実施した保健体育以外で担当した科目があったら選んでください(複数回答化)

36件の回答

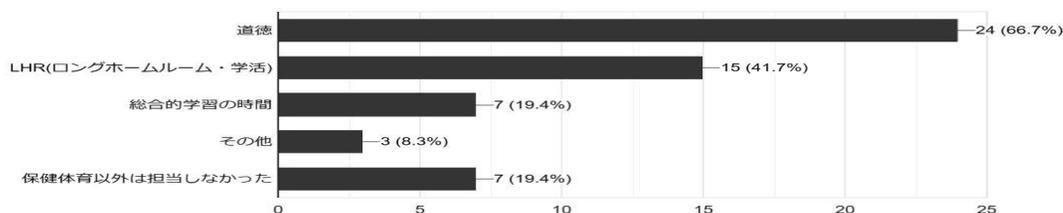


図5 中学校での保健体育以外で担当した単元(複数回答)

Q23.高校で教育実習期間中に実施した保健の単元として近い単元名を選んでください。(保健:複数回答可)

44件の回答

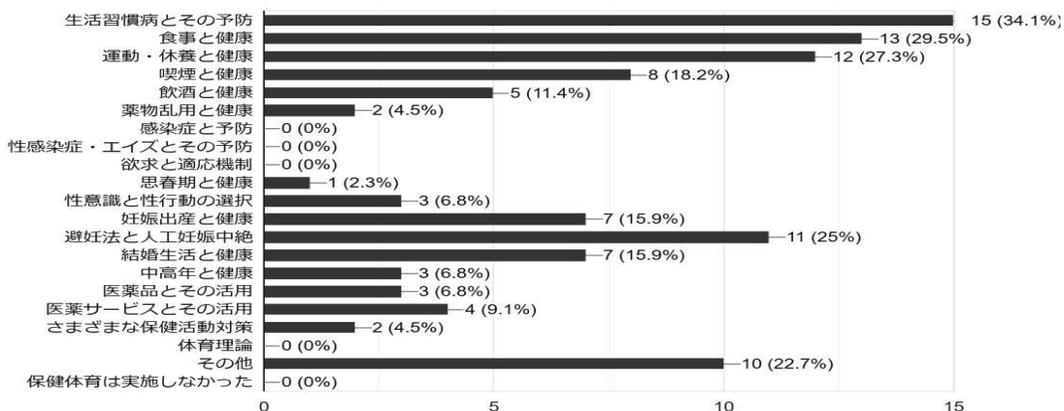


図6 高校での保健で担当した単元(複数回答)

研究47名の上位3項目で160名を超えている。続いて、自分の専門外の種目43名、安全面への配慮や立ち位置24名、運動能力に差があるクラスの指導20名となっている。指導案作成は学校種や教科にかかわらず教育実習生にとって苦勞の種となっている。上位3つの項目は教育現場や学校現場に則して学んでいく側面があることから、教育実習で身につけるべきスキルともいえる。(図7参照)

次に生徒理解・人間関係について苦勞したことについて回答したものである。上位なのは、生徒とのコミュニケーションの取り方33名、生徒への褒め方や叱り方29名、生徒との距離感の取り方について27名と上位3項目で約90名と

なっている。これらはいずれも生徒との関係についての課題である。事後報告でも最近「生徒とのコミュニケーションの取り方」について多数あげられている。続いての項目を見ると、先生方への連絡・報告・相談が14名、他の先生とのコミュニケーションの取り方10名、指導教員との人間関係10名など、先生との関係づくりにも苦勞をしている実習生が多いようである。LGBTの生徒への対応2名や保護者への対応1名などがあげられていることも注目できる。(図8参照)

続いてその他の苦勞したことであるが、最も多かったのは、睡眠時間の確保46名である。ここでも多くの回答項目を用意したが、回答が

Q12.教育実習全体を通して、授業の面で自分自身が苦勞したことや上手くいかなかったことをすべて選びなさい。(授業編：複数回答可)

80件の回答

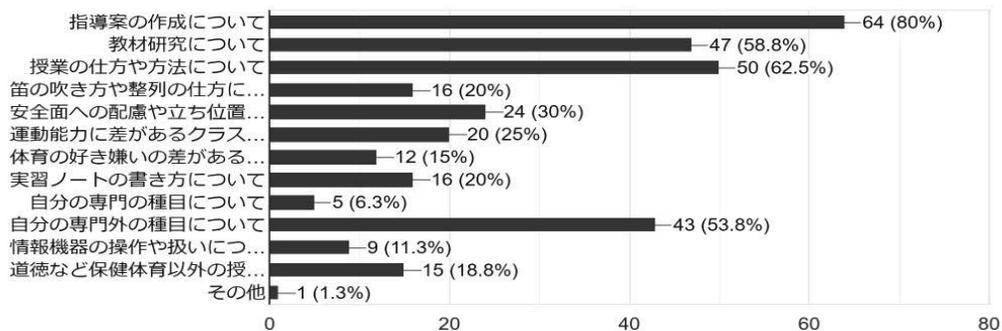


図7 教育実習全体を通して授業の面で苦勞したことや上手くいかなかったこと (複数回答)

Q13.教育実習全体を通して、生徒理解や人間関係の面で苦勞したことや上手くいかなかったことをすべて選びなさい。(生徒理解・人間関係編：複数回答可)

80件の回答

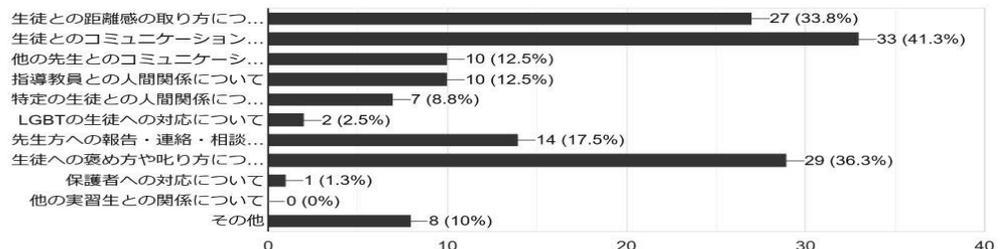


図8 教育実習全体を通して、生徒理解や人間関係の面で苦勞したことや上手くいかなかったこと (複数回答)

あった項目のみグラフに記載した。この項目は自分自身についての項目だが、それ以外は、部活動の指導21名、アクティブラーニング15名、個人情報の扱い10名、SNSの取り扱い7名など学校教育のなかでの項目が多数回答されている。ここでも少数意見であるが、実習中のセクハラ・パワハラ1名という回答が見られる。その内容は他大学の実習生に対するものであった。(図9参照)

5) 大学の授業で取り入れてほしい内容

ここでは、大学の授業で取り入れてほしい内容について複数回答で求めた。上位の項目を見てみると、体育実技の指導案作成の機会を増やす60名、保健の指導案作成の機会を増やす48名、体育実技の模擬授業の学習機会を増やす45名、体育実技の教材研究についての学習機会を増やす44名、保健の模擬授業の学習機会を増やす43名となっている。これらはいずれも保健体育の授業に対する内容となっている。特に体育実技に対する項目が上位に来ている。(図10参照)

その他の内容として自由回答での記述を以下にまとめる。

- ・学年を特定した模範授業もあると実習で苦労しないと思った。
- ・パワーポイントやワードの使い方。
- ・指導案の作成を細々と教えて欲しい。
- ・指導案の提出などをしたときのレビューが欲しい。
- ・職員室での礼儀やマナー。
- ・集団に対しての指導方法。(例、列を並ばせる。列の移動など)

6) 本気で教員になりたいと思ったかと教員採用試験の受験

教育実習を終了した学生は、実習を通して本気で教員になろうと思ったのだろうか。なりたいたと思った33名(41.3%)とどちらかというとなりたいたと思った25名(31.3%)となっている。回答者の72.6%の学生は、教育実習を通して本気で教員になろうと思ったということになる。(図11参照)

続いて今年の教員採用受験の有無を聞いたところ、受験した学生が38名(38.8%)であり、受験しなかった学生が49名(61.3%)であった。教育実習前から教員を目指していた学生数に比べると約20名近い学生が本気で教員になろうと

Q14.教育実習全体を通して、その他のことで自分自身が苦労したことや上手くいかなかったことをすべて選びなさい。(その他編：複数回答可)

77件の回答

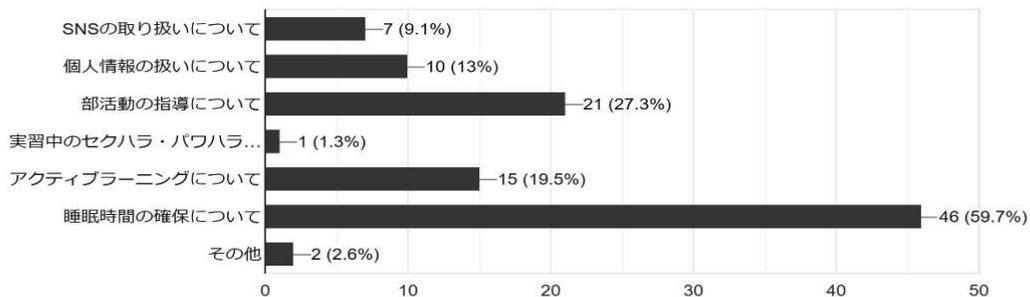


図9 教育実習全体を通して、その他のことで苦労したことや上手くいかなかったこと(複数回答)

Q16.大学の授業の中で、取り入れた方がいいと思うことをうたうことをすべて選びなさい。(複数回答可)
80件の回答

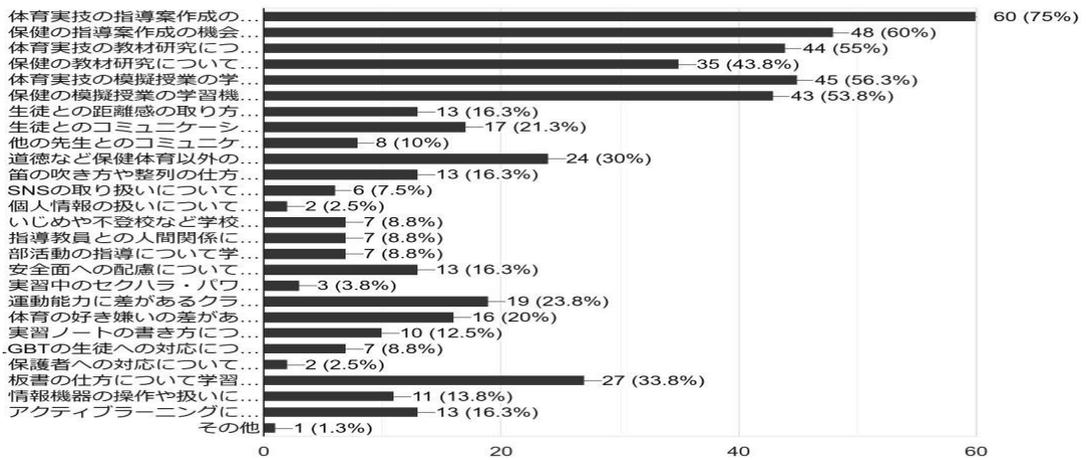


図10 大学の授業の中で、取り入れた方がいいと思うこと (複数回答)

Q11.教育実習を通して、本気で教師になりたいと思いましたか?

80件の回答

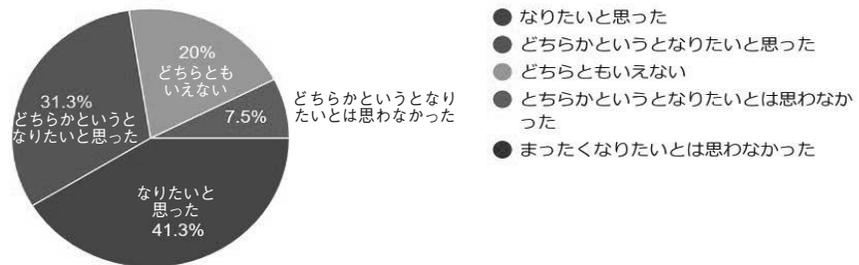


図11 教育実習を通して本気で教師になりたいと思ったか

思ったということになる。

卒業後に講師を希望するかということについては、講師希望有28名(35.0%)、まだ決めかねている22名(27.5%)、一般企業希望25名(31.3%)、その他の公務員希望5名(6.3%)であった。まだ決めかねている実習生を除くと、講師を希望しない実習生は30名(37.6%)と講師を希望する実習生より多くなっている。

8) その他教育実習に関して自由回答の結果

その他教育実習に関しての自由回答について主なものを以下に列挙する。

- ・一つの授業を作るのにクラスの雰囲気やレベルに合わせて内容を変えることが難しかった。自分が思っていることを指導案にし、それを実行する難しさも思い知った。
- ・1番印象に残っているのは専門外の知識につ

いてかなり苦戦したことです。専門外の知識を知ることでかなりスムーズに授業を進められるようになると感じました。

- ・部活動に時間を取られなければ時間が確保しやすい。
- ・分散登校だったため、ホームルーム担任の学級の全員と会ったのも2回程度でした。従って、生徒との仲を深めることが大変でした。
- ・とても充実していて楽しかった。
- ・充実した教育実習であった。
- ・全体を通して、指導教員との関係性が大変だった。
- ・生徒と信頼関係を築けたので良かった。
- ・指導案の学習を細かく分解してやらないと苦労すると感じました。
- ・非常に貴重な良い経験をする事が出来た。
- ・指導案のフォーマットに関して、今回は大学からのものを軸に作成したが、担当の先生から指摘を受けたものは少し違っていた。また、インターネットで調べてみるとそれもまた違った形になっていて、どれが正解か分からない。
- ・授業を行う前に、自分が生徒に「こうしてほしい」という授業の取り組み方について伝えてほしい。
- ・将来教員以外の仕事についてもこのような経験ができたのはとても自分にとって良かったと感じている。教育実習を終えてとても達成感がありました。
- ・とても濃密な3週間だった。一人の人間として成長できたと思う。
- ・しんどかったが、色々な人に助けてもらい、なんとかやり遂げることができた。
- ・教育実習を母校で希望する理由の一つとして、部活動の指導を考えていたが、私の母校

は部活動を持つことができなかった。

4. まとめと課題

2021年度は昨年同様コロナ禍の影響が続き、各地で緊急事態宣言が出された中での教育実習であった。従って実習の現場でも、分散登校や給食での黙食、オンライン学習など、通常とは違う環境の中で学生たちは教育実習を行うこととなっていた。

しかし、同じコロナ禍であっても昨年度との違いは、実習時期の多くがこれまで通り春学期に実施されたことと、教育実習特例や実習期間の短縮などの学生が一人もいなかったことである。一方で緊急事態宣言や感染の蔓延防止に伴い本学から実習校に訪問指導が十分に行えなかったことは昨年と同様であった。

そのような環境の中でも教育実習を経験したことで「本気で教師になりたいと思った」学生は回答者の72.6%であったことは、コロナ禍以前（2019年度）のデータとほぼ同じであった。さらに実習先で苦労したことなども、授業面や生徒理解・人間関係の側面、その他のことでも、上位を占める選択項目などは2019年度のコロナ禍前とほぼ同じ傾向となっている。

2020年からのコロナ禍の影響は教育現場で授業スタイルや生活スタイルなど大きな変化をもたらしているが、教育実習生がその経験から得た学びや苦労をしたことなどは大きく変化していないことが分かった。

本学でも今年度教員採用試験受験者数は、受験しない実習生を下回っており、また卒業後の講師希望者も迷っている学生を除くと、講師を希望しない学生が多くなっている。そのような中でも72.6%の実習生が、本気で教師になりた

いと思った（「どちらかというとなりたい」を含む）ことから、教育実習の経験・体験は多くのことを実習生に考えさせるきっかけになっていることがうかがえる。

大学の教職課程も大学独自の自己点検評価の導入が検討されているが、教育実習も点検・評価の対象となる。これまで教育実習先は大学の所在地近隣の学校に協力を要請し、大学側も実習校と連携しながら実習に当たることも指摘されていた。本学では年間の実習生数の多さから、提携する実習校を増やすことが困難なこと

もあり、母校実習が多くなっているが、全員の実習生に大学の教員が指導担当教員として指導に当たり、全部の実習校に訪問指導に伺い指導する等きめ細かな指導を展開している。

今後は教育実習に送り出す学生の質を客観的に捉え検証するとともに、本学の目指す教師像や目標に対し達成度を確かめる指標作りも課題としてあげられる。

【参考資料】

・流通経済大学教職課程「履修の手引き」2021